

学位論文題名

山東京伝の研究

学位論文内容の要旨

序章

山東京伝の研究史を辿り、これまでに足りない大きな論点として、一つは京伝と演劇との関係、もう一つは京伝を取り巻く文化圏の問題を指摘する。

第一章 山東京伝と演劇の受容

第一節『娼妓絹簾』と梅川・忠兵衛像

『娼妓絹簾』の主人公である梅川・忠兵衛が、先行作である近松の『冥途の飛脚』、及びその改作された作品群からどのように書き換えられているかを詳細に分析し、その結果『冥途の飛脚』に最も近いことを導き出す。しかしながら、『冥途の飛脚』の重要な趣向である「封印切」の仕組みを用いず、道行や「新口村」の趣向も設定しなかった点に注目し、京伝は従来の梅川・忠兵衛像を踏まえた上で、尚且つ新しい梅川・忠兵衛を生み出したと指摘する。また、従来の浄瑠璃・歌舞伎の人物像を踏まえたことにより、洒落本に常套とされた遊びを目的とする遊女遊客の姿とは異なる人物像を生み出したとする。更に、『冥途の飛脚』とその改作系の作品群とは異なる位置にある『八重霞浪花浜荻』からの影響を分析し、個々の趣向にその影響関係を指摘した。その結果、京伝が洒落本の世界に「遊びを越えた恋」を描こうとした点を明らかにし、洒落本の質的転換点をこの作品に認めるというものである。

第二節『錦之裏』と夕霧伊左衛門の趣向

『錦之裏』に影響を与えた浄瑠璃・歌舞伎の一系統をなす夕霧・伊左衛門物作品群を取り上げ、詳細に『錦之裏』との関係を明らかにする。その結果、先行作品では上方遊里の恋の遊びの型として伊左衛門が造形されており、幼さの残る頼りない上方和事の男として設定されていたものを、京伝が伊左衛門を江戸の男として性格の転換を図ったと指摘した。また、夕霧については、先行作品では落ちぶれた伊左衛門に尽くす所に上方の遊女の気質を担った人物として設定されていたものが、京伝は江戸の張をもった遊女として書き換えたことを明らかにした。洒落本に持ち込まれた演劇的手法は、これまでの洒落本の定型である遊女と遊客との一昼夜の遊興を描く様式に対し、遊びを越えた恋を描くことに転換し得たとし、洒落本から人情本という新たなジャンルへ進化させる重要な契機となった作品としてこの『錦之裏』を位置づけた。

第三節『仕懸文庫』と曾我物の趣向

『曾我物語』の主人公である曾我十郎・五郎兄弟を『仕懸文庫』でどのように造形したのかを論じる。京伝は『仕懸文庫』において仇討ちの大義を持たない曾我兄弟を設定したが、如何にして主人公に成り得たかを虎と化粧坂の遊君との関係に焦点を絞り考察していく。まず『曾我物語』の五郎と化粧坂の少将を、『仕懸文庫』で五郎と「おてう」という遊女として出現させ、おてうの真情を描くことで遊びの恋を越えた真実の恋として描いたと指摘する。次に『曾我物語』から曾我狂言の世界にまで範囲を広げ、やはり曾我狂言では常に続けた「仇討ち」の仕組みを確認し、『仕懸文庫』の特異性を再確認し、京伝が従来の曾我狂言と異なる意図を以て創作したものと分析した。そ

れは、第一節、第二節で取り上げた『娼妓絹籠』や『錦之裏』と同様に、洒落本の世界に遊びを越えた男女の恋を持ち込むことであったと指摘する。更に、『仕懸文庫』では寛政の改革に対する批判意識があることを指摘し、洒落本の世界に新たな趣向を展開しようとした試みではないかと指摘した。

第二章 山東京伝の小町像

京伝作品に描かれた小町像を考察することにより、京伝の女性像の特徴を明らかにし、その意義を検討する。最初に中世までの小町像の展開を概観し、小町の若いや貧しさ、苦しみの姿を描く傾向であったことを指摘し、近世に入って歌舞伎・浄瑠璃の影響を受け、若く美しい小町像へと移行していくことを明らかにする。さらにまた、他作者との小町像の違いに目を向ける。多くの作品は小町・黒主の世界を近世風書き換えたものであり、「七小町」の趣向も色々と利用されていることを指摘し、これに対し京伝は、百人一首の世界を中心に小町を描き出す傾向があること、また、黄表紙作品において、従来男性を拒む女性として描かれていた小町を、男性を積極的に受け入れる女性へと書き換え、さらに幸せな結末を用意した点に特徴がみられることを指摘した。

第三章 山東京伝と江戸座俳諧

第一節 『通言総籙』をめぐる江戸座俳諧―石原徒流と吉原仲の町茶屋主人の俳諧活動

洒落本『通言総籙』本文に登場する吉原仲の町茶屋主人たちや大名子弟が関わっていた江戸座俳諧に着目し、吉原における俳諧の位置を論じる。具体的には『通言総籙』本文と当時の通人による書入れのある早大本『通言総籙』から分析し、最初に書入れにある「とりう」なる人物を取り上げる。俳諧宗匠「とりう」は、茶屋主人と江戸座俳諧を結び付ける重要な人物である。これまでこの人物が江戸座俳諧の宗匠石原徒流、あるいは酒井抱一（俳号屠龍）とする二説あったものを、詳細な分析により石原徒流であると結論付けた。続いて、妓楼扇屋主人墨河と京伝との関係を指摘し、墨河が京伝の有力なパトロンであったと推定した。更に、『通言総籙』本文に登場する人物について、多数の俳書等进行分析することからそれぞれ実在の人物を明らかにしていく。特に取り上げた人物は、秀民、魚民、巨園、翠羅、清蘿、雪幣等である。それら人物と他の京伝作品との関係にも目を配り、徒流と吉原仲の町茶屋主人達の俳諧活動が、江戸座存義側に属していたことを明らかにした。また、吉原連中にとって指導的役割を果たしていたのが酒井抱一であることも指摘した。吉原における俳諧連中の重要性について、江戸座存義側の俳諧を通じた位置付けで捉えなおすことが可能であることを明らかにした。

第二節 山東京伝と雪川―雪川と江戸座俳諧の係わりを中心として

吉原の文化圏を作り出し、江戸座俳諧を支えた大名子弟は京伝の後援者でもあり重要な存在であったが、その中でも『通言総籙』にも触れられる松平雪川の俳諧活動を考察することにより、雪川と大名子弟、江戸座俳諧宗匠との関係を明らかにし、京伝を取り巻く文化圏の一端を解明するものである。具体的には、雪川と江戸座俳諧宗匠の一世・二世旨原、そして深川洲崎にあった江戸料理茶屋の魁として名高い升屋主人達との関係を明らかにする。升屋を舞台として雪川の周囲に大名子弟や俳諧師、戯作者らによる文化圏が形成されていたことを指摘した。更に雪川と旨原門との関係は、吉原連にも関わりのあることも明らかにした。続いて、雪川と江戸座俳諧宗匠岩松の関係にも注目し、雪川の俳諧交友における文化圏の広さを明らかにしていく。その結果、雪川の俳諧活動の場が江戸の中でも深川や吉原といった文化の中心地であったこと、雪川と当時の権力者である他の大名達との俳諧における繋がりについて、また、大名俳諧だけではなく、江戸座俳諧に深く入り込んで自ら江戸座俳諧宗匠の後援者となるまで活動を行う内容の濃いものであったことを明らかにした。これらより、当時の文化圏の基調となっているものが、雪川を始めとする江戸座の大名俳諧にあったとし、京伝を中心とした戯作界の交友関係を見る上での重要性を明らかにした。

終章 総括と今後の課題

これまでのまとめと今後の展望について方向性をしめた。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 富 田 康 之
副 査 准教授 金 沢 英 之
副 査 准教授 鈴 木 幸 人

学 位 論 文 題 名

山東京伝の研究

本論文の審査の手順については、以下の通りである。

平成 22 年 7 月 16 日	審査委員会発足
平成 22 年 7 月 20 日	第 1 回審査委員会 論文の配布と審査日程の調整
平成 22 年 9 月 10 日	第 2 回審査委員会 論文内容の検討と質問事項の整理
平成 22 年 9 月 14 日	口頭試問の実施
同日	第 3 回審査委員会 口頭試問の内容検討と評価、学位授与の判定
平成 22 年 9 月 15 日～	第 4 回審査委員会 審査結果報告書（案）の検討と確認
平成 22 年 9 月 27 日	（案）作成（主査）、回覧・校閲（副査）
平成 22 年 9 月 29 日	第 5 回審査委員会 審査結果報告書の確定
平成 22 年 10 月 8 日	教授会報告
平成 22 年 11 月 12 日	教授会にて決定

本論文はA4版 109 頁(400 字詰原稿用紙換算約 334 枚)で、序章、第一章「山東京伝と演劇の受容」、第二章「山東京伝の小町像」、第三章「山東京伝と江戸座俳諧」、終章の五章からなる。山東京伝の作品と演劇との関係、及びそれら作品を生み出す背景となった京伝を取り巻く文化圏について論じた。従来、京伝の作品研究は個々の作品を個別に論じていたものが多かったが、それら作品群と演劇との関係に焦点を絞り、洒落本の世界に演劇を取り込むことにより、どのように作品の質が変化していくのかを丹念に検証した。また、京伝によって女性の代表としての役割を負わされた小野小町を取り上げ、遊女を含めた女性像の描き方の解明を試みた。更に洒落本の中で登場する店、あるいは人々のモデルについての先行研究をヒントに、更に詳細に検討し、それら人々のネットワークを明らかにし、これまで狂歌連との関係しか論じられなかった状況から、新たに俳諧連中のネットワークが作品に影響を強く与えていることを明らかにした。

本論文の成果として以下の事柄が挙げられる。

- 1 『娼妓絹簾』は、梅川・忠兵衛を扱う先行作品群の中でも『冥途の飛脚』の影響が大きいことを明らかにした。また、先行する浄瑠璃・歌舞伎の人物像を踏まえることにより、洒落本に常套的な「遊びの恋」からの質的転換を明らかにした。

2『錦之裏』に影響を与えた浄瑠璃・歌舞伎の一系統をなす夕霧・伊左衛門物作品群を取り上げ比較分析を行った結果、先行作品では上方遊里の恋の遊びの型として造形されていた上方和事の伊左衛門像が、江戸の男として性格の転換が図られていることを明らかにした。同様に夕霧は江戸の張をもった遊女として描かれていることを指摘した。

3『仕懸文庫』に曾我物の世界を用いながら、「遊びの恋」を越えた「真実の恋」を描いていることを指摘した。

4洒落本の中で登場する人々のモデルについての先行研究をヒントに、当時出版された俳書の膨大な資料を手掛かりとし丹念に人物関係を整理し、その結果、吉原における俳諧連中の重要性を見出した。

5雪川の俳諧活動を調査することにより、雪川と大名子弟、江戸座俳諧宗匠との関係を明らかにし、京伝を取り巻く文化圏の有り様の一端を解明した。

以上、本論文には多くの新知見が示されているが、委員会において、以下のような問題点が指摘された。

1 研究史のまとめ方がやや乱雑である。

2 戯作としての洒落本の読みの中で、「真の恋」を描くという目論見があるにせよ、うがちなどの笑いの部分までを「真の恋」の文脈として読み解いてしまった所がみられ、作品理解がやや強引な点がある。

3 小町像の問題を洒落本の中で解釈しようと試みているが、読本のジャンルでも京伝は小町を取り扱っている。それらを含めて小町像を把握するべきであり、対象作品の絞り方に疑問が残る。

4 用語の使い方がやや不鮮明な点があり、広義、狭義の使い分けに曖昧な点が見られる箇所が見られた。

以上のように、本論文に問題点がないわけではない。しかし、そうした問題が本論文の価値を著しく低下させるものでないことは言うまでもない。本論文におけるこれらの視点は当該研究領域での先駆的な価値を有しており、従来の中京伝研究では欠如していた部分である。本論文により俳諧連中のネットワークが存在していることが明らかにされた成果は、恋川春町や朋誠堂喜三二等の他の戯作者達の創作も俳諧を中心としたこの文化圏の影響を強く受けていたものと考えられ、広く江戸文化圏の広がりや役割の問題へと発展が大きく期待されるものであり、極めて高く評価できる。新たな視点からの研究が活性化されることが十分に期待されるものである。